

## 2 半井家起源についての一考察

「半井小草紙」に出逢って

半井英江

平成十一年十一月一日から三日間、和氣清麻呂と姉の広虫を祭神とする護王神社で、医療文化史サロン協賛会（中橋彌光会長）が、第七回医療文化史サロン展を開催した時のことです。

創業四百有余年(旬)片桐棲龍堂薬局(堺市)の片桐平智氏が「半井小草紙」を持参されましたので、早速展示致しました。そして許可を得てコピーさせて頂きました。

「半井小草紙十三丁」は片桐氏により、きちんと装幀されて、「室町中期写 半井三位法眼家伝他十三丁 三木榮博士旧蔵識語入 表紙後補」と付されていました。内容については、主に産婦人科用の治療薬として配合される秘伝薬、家伝薬が特集されているのでしょうか、残念ながら理解できません。しかし非常に興味深いのが最

後のページです。そこには次のように書いてあります。

右、十三丁

・吾家

・古ノ家 ・口傳

半井小草紙

・當家 ・丹氏 ・和氏

本書に下の名 ・三位入道

見ゆ ・家傳方

三木記

色の薄い朱点ハ三木付する也

それらの名を確認するために目を通したところ、此方半井三位法眼家傳秘方云々の個所も見つかりました。

またこの「小草紙」は、一冊の原典からではなく、多くの家伝書からの抜粋を写したものでないだろうか。一層の興味を覚えたのです。平安時代以降、典薬頭を世襲してきた和丹両家の秘すべき家伝方の版權について、あるいは版元として両家を統合し、新しい家元を創出する工夫が室町中期の社会情勢の中で必要になったのではないのでしょうか。

その工夫として、和丹両家が「仲らい」で結ばれたのではないかと思えます。

広辞苑（新村出編）には次のようにあります。

『なからいへ仲らい』①人と人との間柄。交情。交際。交際。

②親族。血縁。』

『なからへ半ら』①およそ半分。なかば。②まんなか

中心。③なかほど。途中。——むすこへ半息子へ婿。』とあります。

室町時代のいつの頃からか、和氣家と丹波家が婚姻によつて親戚となり、利害を共にするようになったのではないかと考えております。その場合、名義は和氣氏を取り、実質を丹波氏がとつたのではないのでしょうか。和氣氏が妻の側、丹波氏が婿というケースが両家共に家系が多岐に別れているなかで、かなり多くあつたのではないかと思います。

有名な丹波重長の長男が和氣明重Ⅱ半井明重であり、その弟利長が和氣利長Ⅱ半井利長であることは通説ではありますが、医学史上明確にされてはいないものや、既に研究されて発表されているのに、広く知られるに至っていない歴史的事実があるかと思ひます。

例えば服部敏良著『室町、安土・桃山時代医学史の研

究』の中に取り上げられている「日記文学」などに目を向けて広く資料を求めていけば、興味深い事実が明らかになるのではないかと考えております。

日本医史学会に入会する前に、父からは「昔、典薬頭であつた和氣氏の家の井戸を半分に仕切つて、半分は天皇のために、半分を他の用に使用していたので、天皇から半井の名を賜つた」とのみ聞かされてきました。最近では、後柏原天皇の御代の明親の場合は正しいにしても、半井姓の由来は和丹両家の「なからい」だと考えるようになりました。半井姓発祥の時期についても、室町中期以前であると考へていた時に「半井小草紙十三丁」に出逢つたのです。